

三河 アララギ

平成二十九年 2017年

十二月号

第六十四卷 第十二号



ニューヨーク日記(134) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

DECOY – PEKING DUCK

Blue Shoe Diaries



北京ダックが美味しいと話題のレストラン行ってきました～。モダンでNYっぽい所。でもチャイナタウンで食べるくらい美味しかったよ。アペタイザーとかはもっとモダンで面白いかった。それからもしかしたらダックより美味しかったのがカニとホタテの炒飯! 止まらなかった!

Satisfying my Peking Duck craving at a cute little restaurant in the village called Decoy! Pretty classic peking duck, but maybe more meat than you'd normally get? I like that too tho, to munch on separately from the wrap. The appetizers, like the sweet potato noodle with uni are a lot more modern so it's definitely a different experience from eating at a restaurant in chinatown. Another highlight to the meal, the crab and scallop fried rice! Crave worthy!

目次

第六十四卷第十二号(通卷七六八号)

表紙・ポインセチア	今泉 由利 (1)	鈴木美耶子 (26)	柳田 皓一 (35)
ニューヨーク日記(134)	Blue Stone (2)	吉見 幸子 (26)	松本 周二 (35)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	牧原 正枝 (26)	山迫 京子 (35)
三河アララギ歌集III	大須賀寿恵 (5)	石田 文子 (26)	森岡 陽子 (35)
歌集「續草々」	今泉 米子 (6)	森 厚子 (26)	山元 正規 (36)
歌集「はゞきくさ」II	河原 静誠 (7)	山崎 俊子 (27)	今泉 如雲 (36)
手鏡	岡本八千代 (8)	三田美奈子 (27)	植村 公女 (36)
石鏃	今泉 由利 (9)	水野 絹子 (27)	「二茶名句集」
無花果ジャム	弓谷 久子 (10)	牧原 規恵 (27)	かさね吟行会
沙羅	内藤 志げ (11)	稲吉 友江 (27)	『酔いの徒然』(68)
廃家の集落	林 伊佐子 (12)	新 涼夏 (28)	本からのあれこれ(25)
桜紅葉	清澤 範子 (13)	濱口健太郎 (28)	ある自然科学者の手記(67)
招かざる客	伊藤 忠男 (14)	眞下 愛 (28)	絹の話(85)
古刹	森岡 陽子 (15)	黒部 巴美 (28)	楽しい時間(61)
中秋の月	鈴木 孝雄 (16)	久岡日南子 (29)	漢詩研修(十三)
井伊谷の	白井 信昭 (17)	亀石 理多 (29)	『歴代天皇御製歌』(八十三)
月に祈りぬ	阿部 淑子 (18)	河添 有羽 (29)	貫名海屋資料館(52)
平和を	足立 晴代 (19)	山本 英史 (29)	土偶(1)
独り	杉浦恵美子 (20)	津之地直一 (30)	「氷魚」のことから(203)
桃子と	山口千恵子 (21)	童謡「こいぬの コロちゃん」	みなさまへ③④
晩秋	夏目 勝弘 (22)	高橋 育郎 (32)	編集室だより(二〇一七年十月)
歌集「夢のつづき」	水上 信子 (23)	田中 清秀 (34)	野菜の花(18)
私の一首	森岡 陽子 (24)	重野 善恵 (34)	浜田 (34)
贈呈誌	白井 信昭 (24)	今泉 由利 (34)	『お知らせ・三河アララギ』について(60)
『こゝろよせ』	夏目 勝弘 (25)		
こゝろよせ			

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

おどろかすとびたつ音は昨夜よりここにあそびし木菟なるべし

ものあらし嵐のあとも朝いでてわれはおなじきところを歩く

すずむしの糧とくれたる茄子いくつ食らふは人間のわれとわがつま

書きつぎしその折々のこころさへ忘れ忘れてすぎし十年

遅れたるダチュラの青き蕾の下ひるのやすいをわれのむさぼる

核酸にいのちこもると追記して物質現象の死に到るめり

はびこらず絶えてもゆかぬ一叢に刈安らしき穂の二三本

年々に蒔かざる花の立ちそろひ色は交らふくれなるも白も

夏蜜柑に癌死救へる一列にもまことひそみてゐるかもしれず

むらさきのぶだうを主食のごとく生きてわがゐる今日を奢りとはせず

三河アララギ歌集Ⅲ

大須賀寿恵

冬の陽をしばし当てをりわが病める腰椎の辺より温くなる

梅雨時の湿りは雁皮紙にも及び書きゆく文字のにじみひろごる

柱にて遊びゐたりし幼児が手放しに立つ五秒ばかりを

時刻くれば棚の薬を取りいだし飲みくだすなり十八年目か

注射受くるこのひとときを安らぎてベッドの上に眼閉ぢをり

夕べなほ火照り残れる鉄平石の小径を歩みてくだりゆきたり

六十の手習ひはじめの臨書して赤き丸今日はひとつ貰ひぬ

やうやくに書きし履歴書をポストに入れぬ差入口の雨を拭ひて

黒海のおかきところに筆の穂の馴染みてきたるまでの時の間

単純化せよと言はれて立ち出づる孟宗薺の十七夜の月

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

ふたたびを招かれて来てほのぼのと小雨にけむる御苑のさくら

再びの御苑に心やすくて雨の芝生の白き花萼

江戸表へ出仕の度の玉だれを汝が曾祖母は待ちまししとぞ

座席まで送り来たれる子に分つ曾祖母好みの菓子玉だれを

萎えたるはつぎて摘みとれと教へつつ花のさかりの著莪を手渡す

高々と見ゆる隣の鯉幟よく泳ぐ日はいくばくもなく

雨やみて空気にはふと思ふときみどりの小花を降らす楠の木

まなぶたに明るむはやき朝々をさだめし時まで起き出でもせず

次々の花に追はるるおもひにてむらさきなびく梅檀の花

わが庭の木立の蔭は満天の星のごとくにカラクサの花

歌集「はゞきくさ」II

河原静誠

野球あそび了へて幼等口々に明日もといひてかへりゆきたり

鍵っ子のとみゑの後に尾をふりて今日もしたがふ野良犬二匹

明日よりは延長保育始めなむ午睡の蒲団を高くつみあぐ

園児等のひるねの姿みおろして給食日誌をわが記しをり

幼等は食ふまねをしてくだきゆく泥まんじゅうをその手にうけて

幼等の昼寝してゐる傍に七夕まつりのこよりをよりぬ

腸の癒着の痛みに耐えて園児等と石けりをする吾の一日

袴着け傘を片手に太郎冠者踊り了へたり擬白の秀雄

獅子舞の鼓はボール紙を張りあはせ保母われの作るまた徹夜して

三才児に打楽器教へ今日一日吾の仕事のたのしかりけり

手鏡

蒲郡 岡本八千代

久しぶりに晴れたる秋の空の下受けとりし物ああ「出雲」より
包み解けば目の前にあり手鏡の「八雲塗文芸展出雲ノ言ノ葉」

出雲様へ奉納したるわが歌は「宵待草の花あかり」の歌

ま白きの包紙そつと開きたればきらり光れり八雲塗の手鏡

手鏡にわが今日の顔映したり少し寂しげな老ゆらくの顔

手鏡の裏側に書かれし花と歌宵待草の花あかりの歌

宵待草「たった一つの花あかり」を歌ひしわが歌忘れじの歌

送り来し出雲の神様の手鏡に今日の己をつくづくと見る

老い老いしわが顔八雲の鏡の中生きて見られる今日の倅わせ

背のびして洗濯物を干さむとす自ずと見ゆるけふの青空

洗ひたる夏の帽子が風の中われの頭のやうにゆれをり

月見むと庭外の道に佇ちたれば稲生の海のかすかな潮の音

石やじり 鏝

東京 今泉 由利

パタゴニア荒野に石鏝探せしを思いいだせり西ヶ原石鏝
地球なるもつとも遠き国と国と人間ひとは造りぬ同じき石鏝
幼子を強く抱ける母土偶縄文時代の心のなかへ
自らの食せし貝の貝殻を積み重ねある自分貝塚
西ヶ原の貝塚ぎつしり二枚貝私の貝塚巻貝多し
ひと握りの土の調達出来ざればコーヒー小木水耕しをり
種無きを少しばかりは淋しみて川中島のマスカット食む
恐竜と奪い合ひ合ふことはなし今年银杏焙りてゐるよ
瓜坊は朱実となりぬ烏瓜やがてその根は天花粉とぞ
想像は出来ざる膨張つづくると宇宙のなかのひとりゐる部屋

無花果ジャム

豊川 弓谷 久子

孫運転の車に乗りぬ主治医まで月に一度の定期検診

肺炎の予防注射を受けてをり効果は五年と聞かされながら

黄金色のみのもり田眺めむと足踏みしめて今日も出で来し農道に

父と母が刈りて束ねし稲束をかつぎ運びし小学生の日よ

はね出しただけと言ひつつ今年も無花果数多呉れてゆきたり我が隣人

大鍋にて無花果甘く煮込みたり我が手作りのジャムの仕上り

パン食の我が家の朝はヨーグルトに無花果ジャムをたつぷりと

台風も吹き返しの風も収まりぬ虫も啼かずに音無き真夜中

箒草と馴染みしコキア少しだけ穂先に赤味帯びて来りぬ

剪定のなされし庭に秋の日はあまねく照りて石露の咲く

草花を培ふ楽しみ覚えしか子がプランターに種を蒔きをり

沙羅

豊川 内藤 志げ

沙羅の葉に雨の雫のたえまなし虫穴多し尖り芽も見ゆ

厚き空迷ひつ朝の散歩する赤石の連なる峰すがすがし

台風の返しの風も治りぬ澄み渡る空に鋭き月が

今日もまたひねもす続く雨雫く沙羅のわくらば一人見ている

台風にトンネルのビニール切れぎれに泥にまみれて夫は引き寄す

やわらかき柿の一つを枝ごとに炬燵の上に置きて眺むる

上野坂歩みの途中振り向けば明日は十五夜白き月見ゆ

空見上げ傘を手にして歩み出づ赤石に続く山波青く

真向の月に棚引くむら雲は十五夜ならず十六の月

低き雲厚く広がるその下を一機のへりが音響かせながら

廃家の集落

岡崎 林伊佐子

廃村の道祖神こそ淋しけりわれ一人行く山峡の道

半月に照らされ並ぶ廃村の家暗くして亡き人しのばゆ

野の径は轍わだちの跡のみ草生ひず訪う人もなき秋の山里

田も畑も杉の木立に変わりたるわがふる里は廃家の集落

帰省して都会に町に移住する友らをしのぶ長き歲月

変遷するわが古里を歌に詠む拙なき歌集も七冊となる

刈り草と野菜の屑を混ぜて敷く有機栽培をわれは楽しむ

老いわれの血など吸うても不味まずからむ蚊は執拗まづにまつわりてくる

朝な夕農仕事をして帰宅する秋の一日も忙しく昏くるる

稔り田ひえに稗ひえ抜く媪ひえに声かけて勞りて行く朝の散歩に

農仕事を終えて見上る茜空飛行機雲の白く棚引く

桜紅葉

春日井 清澤 範子

名月と満月とまたスーパームーン夜空にくつきり木槿薫る

今年は台風次々おそひ来て衆議院議員選挙は雨の降る中

梅畑が駐車場にと変り行く朝早くからブルトーザーの音

押しボタン押しして神社に参拝す色づき始む桜紅葉は

丈低き桃の切株耕やされ駐車場にと変り行くなり

台風の雨また前線の雨降り続き今朝の低音セーター恋し

午前六時今日も最善尽さむよ鳥の声聞きつつ暫し床の中

木犀はにほひ放てりオレンヂの花は夜来の雨に散りぼふ

すやすやと夫の寝息に安堵する狭窄症の手術して六年

吾の手を引き握る娘の手暖かきかな気持通ひて

招かざる客

大阪 伊藤 忠 男

招かざる台風いつも週末に行く行けない和歌山の家

紀ノ川の溢れ浸水床上とニュース見る度気もそぞろなり

青き空いつのことかと指を折る今日も黒雲憂鬱なりや

生きる糧なりとは言うも限りあり時の過ぎるがいとも早きか

仕事終え家庭教師に遺族会顔出しすぐに同窓会へ

誕生日やっところまできたのかと感慨深きもいつときのこと

明日会議不毛な議論またなのか無駄としりつつ資料を作る

シルエット残し夕暮れ行く家の輪郭山の凹凸

よきにつけ悪しきにつけて淡々と惑うことなき我が道進む

ふるさとの薄らぐ記憶なに残す青き海原緑の野原

古刹

東京 森岡陽子

何と無く黄昏時に鳴き初むる夜更けはいつそ虫の音響く

杉玉は成田参りの秋雨に酒屋の軒先雫静かに

昼下り上野の杜の美術館シルクロードの刻を再生

残暑日に落銀杏は早々と臭広げる美術館あたり

のら猫の寝床にと敷く段ボール虫コナーズ揺る下に

十五夜の明り雲間に飛鳥山薪の灯る能楽の舞台

十五夜に向って歩く坂道は明りと影に秋風の吹く

武蔵野の景色広がる境内林自然と歴史古刹の風情

山門をくぐり行く先仏殿の茅葺き屋根に秋雨の降る

新蕎麦の幟の並ぶ田舎道素朴なこしらえ家族の商ひ

中秋の月

沼津 鈴木孝雄

歩くのに服装などは気にせぬがウォーキングガールは色鮮やかに
クルドからカタルーニヤまたロヒンギヤと民族独立の願望何処へ

豊橋の中秋の月テレビに映るあわてて窓開けいっしょの月観る

ジャケットを引っ張り出したポケットに10年前の山手線切符

菊シーズン先がけて咲く浜菊の真つ白な花周囲明るく

豊橋がロケ地になった「陸王」観る市役所前に知り合い見えず

トマトの株いまだ赤い実育ちおり抜くに抜かれずはや神無月

雨上がり青空広がる菜園にアキアカネ来て喜々と舞う

昨年と同じようにアキアカネ葱の葉先で挨拶くれる

青虫は全てを取ったはずなのにブロッコリーの葉をまた食める

井伊谷の

豊川 白井信昭

くねくねの道カーブする一瞬にて槿むくげの花は目先に迫る

頂近く階に朽ち木横たわる潜るに低く跨ぐに高し

ひと晩に十八号は遠く去り台風一過の朝の青空

本坂道姫街道とも気賀の街関所まちを外すR362

井伊谷の城跡巡るひと処たがのき榊の大木R257沿い

湖うみ近く陽のあるうちにと道変える未だ通らぬR301

三ケ日より姫街道と別れ来山道き今し陣座峠

さ庭木の揺らぐとも見えず日の出前息子夫婦の今日の旅立

北欧の四ヶ国巡るハネムーンこの一週間もテロ無きを願う

ハネムーン北欧の旅の一週間恙つつが無く帰国の知らせ

月に祈りぬ

横浜 阿部 淑子

中秋の雲の切れ間に顔見せし月に祈りぬ地球の長寿を

盆に盛る月への供え捧げ持つ届く光に涙ぐむ我

「かぐや」より月の状態確認と月面基地の期待もふくらむ

店先で目に飛び込みし萩の花一鉢求め霊前に供う

スタッフに付き添われつつ百均へ仲間の買い物おやついっぱい

平和を

東京 足立 晴代

変りゆく雲の流れの見事さに自然の動き偉大なるかな

四季ありといえども寒暖変化あり合わせる日々の忙しき

世の中にいろいろ心配限りなく無我の境にて日々過すなり

テレビみて味覚そそわれ食欲の秋何でもおいしく幸なり

人の和の一つになりて望むもの続く平和を祈る我なり

独り

蒲郡 杉浦恵美子

独りには無駄に明るい台所一合だけの米を研ぎをり

見えねども一条たしかに触れにけり蜘蛛の糸今朝庭の片隅

スーパーの棚に見つけし缶詰のヴィシソワーズに夫思ひ出づ

何時の間に守宮の番が居なくなり独りの夜長が始まるかもね

この寿司屋幾度通ひき杯を重ねて夫は機嫌よかりき

開放の図書館の窓そよ風と新幹線が通り過ぎ行く

独りとは声立て笑ふも虚しかり笑ひはどうやら共感するもの

何処となく衰へ感ずる折がある一日家に籠りて居れば

信楽の陶器屋ひっそり人けなく剽軽狸が林立してる

実を言へば世間のことなど関心ない語る相手が居ないのだもの

桃子と

豊川 山口千恵子

季違へず黄花リコリスの花芽出づ庭石脇に今年は四本

彼岸花草刈り跡に残しあり赤々咲ける大き一群

玄関にあかり終日灯りゐて住みゐる人をつひぞ見かけず

夏の陽をすっかり浴びし紫蘇よりのゆかり粉香る朝の飯に

人込みに大きく手を振り呼びてゐるやうやく気付きぬぼんやりわれは

久しぶりに名古屋の街にひとり来ぬ「レ・ミゼラブル」を桃子と観むと

白妙のダチュラは咲けり一輪のみひととき心楽しくなりぬ

焙じ茶の香りよろしき朝なりやうやく秋になりゆく気配

浮草をよけて時折飼をやりぬガラスの鉢の五匹のメダカ

ただよへる香に気付く花の季金木犀の咲くを見に出る

晩秋

豊川 夏目勝弘

衰へしネムのミドリの葉がくれに茶色となりし莢実が目立つ

庭なかなかのミドリの色の衰へりツバキの厚き葉せんざいみどり千歳緑

庭なかなかの低きを風の通りゆくこたへて揺れるハランの広葉

ふたたびの花をつけたりユウゲシヨウ今朝も目覚めて淡き紅

衰へのいよいよ目立つネムの木に一花二花うすきクレナキ

刈り込みを続けこし裏庭の雑草の足にやさし厚らに繁る

二度三度庭のイヌムギ刈り込みぬもはや種穂の出づることなし

出づたび抜き捨てこしセンダンソウつひに芽生えず我の勝なり

庭なかの草の緑を清しきと思へることを嬉しみにけり

除草剤撒かずなりし庭なかの草の繁りも気にならずなる

歌集 「夢のつじき」

水上 信子

千年余変らぬものに触れたくて敦煌石窟をまたも訪いたり
一筆で円を描きてその中をひた走るのみ広き台地よ
地平線を丸く眺めて立ちてみる果てなき果てに何求めしや
訪ね来て思いはいつも同じこと変らぬものの歴史の重み
自らを仏の弟子という人の傍らにありてわれらは菩薩
御仏を語れる声はほの暗き石窟の壁にしみてゆくなり
広々とただ広ごれる砂漠なり赤き落日人の恋しき
新春をうららさわやか迎えたり興福寺にて阿修羅にまみゆ
この道を古人も歩みしか行く手鮮やかに朱雀門あり
まほろばの里のガイドは親しげに万葉人の恋を語れり

私の一首

夢うつつ慕情シャレード深夜二時アンディーの唄ラジオから聞ゆ

森岡陽子

昔からラジオの深夜番組が好きな私は、今でも聞いている。昨晚、うつらうつらと眠り掛けた時、アンディーウイリアムスの素敵な唄が聞えて来た。どれもこれも馴染のある素敵な歌ばかり。若い頃憧れて見たハリウッド映画を思い出しながら目はすっかり醒めてしまった。シャレードのオードリーヘップバーンは本当にきれいだった…

今日よりは玄関口の上がり下りセンサーライト闇を追っ払う

白井信昭

雨天の昼間でも暗ほつたい玄関（内外共40W）。

踏棚が高過ぎるが故に上がり下りが少し煩わしくなった為、支柱にセンサーライト（乾電池式1WLED）を取付けた所、一層明かなくなりスムーズに。

贈呈誌

夏目勝弘

秋楡(第94号) 中島宣子

○朝日浴び黄色に光る新緑を花と見紛う今日五月晴れ

鹿児島アララギ(七月号) 江藤金博

○山峡は濃霧に包まれ朝明けに牛は交々鳴き交しをり

○日陰より延びて支柱に絡みたる山芋はつひに垣根を越えぬ(8月号・月精薫)

○雨やみて夜半のこほぎ鳴きてをり娘帰りゆきし夜は寂し(9月号・増田教子)

終(八月号) 服部忠夫

○それぞれの匂ひに咲ける庭の花いつしか我の手より離れて

○病む脚を労りながら屈伸す家族寝ねたる夜更けの厨に(九月号・井林勇二)

冬雷(8月号) 赤羽佳年

○午まへの眠りより覚め朝酒の残れるまなこに櫂の嫩葉

○これでもかこれでもかと大輪を庭いっばいに色どる紫陽花(9月号・三十一徳)

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

いただきし木槿一枝瓶の中根つきゆくかな白き根一つ

テーブルの上のローズマリー見つめつつ初めてカフェにひとりの紅茶 鈴木美耶子

スイスイと赤蜻蛉飛ぶわが庭にああ幼と花火出したる思ひ出

長月の今日は重陽菊生けむ障子戸の外に虫時雨の声 吉見幸子

二百余の採掘跡はそのままよ大型バスにて宇都宮を走る

霧のなか採掘跡をなぞりゆく千五百万年前よりの塩か 牧原正枝

満潮みちしほにのりて岸边に寄る鴨の数ふえつつ夕べの茜

法師蟬ひと声鳴きて飛び去りぬ折しものぼる淡き満月 石田文子

ハワイアン流るる吉良のワイキキに砂に夢中の藍夏あいかは三歳

母親の膝にフラダンスする一歳の結暉ゆうきはまたも踊り出す 森厚子

いつも見る景色のやうに見えなくてただ散歩してゐる秋風のなか
台風の花桃の枝へし折れぬ残りし枝の心もとなきかな

山崎 俊子

わが畑の電柱にきてピイヒヨロロと鳴きしとんひ鳶がこのごろ来ない
みんなみ南にデネブの星の煌めけりまた巡りくる夫の命日

三田美奈子

姉川を溢れさせたる嵐さへわが住む三河は慈雨となりつつ
キイキイと声のする方目をやれば運ばれてゆく豚の数頭

水野 絹子

草取りのボランディアするわれら四人集ひてよつたり楽し八十歳にして
盛夏過ぎ台風の雨にも復活のわがピーマンの緑つややか

牧原 規惠

今宵なく虫らの声のきれぎれに切なく聞こゆ秋の夜長の
秋桜をワイングラスに挿してみるちよつぴりお洒落な秋になりしか

稲吉 友江

現代学生百人一首

東洋大学

SNSリアルとキャラを使い分け本当の私はどこにいるのか

開智日本橋学園中学校三年（東京都）

新^{あたらし}

涼^{すず}夏^か

参詣道岐阜城に着き天守なう信長も見た万緑の海

慶応義塾中等部一年（東京都）

濱^{はま}口^{ぐち}健^{けん}太^た郎^{ろう}

留学で兄が去ったら一人部屋うれしいはずがどこかさびしく

慶応義塾中等部一年（東京都）

真^ま下^{した}

愛^{まな}

気づいたらすぐ横にいて腹おさえ自分のように笑ってくれた

慶応義塾中等部三年（東京都）

黒^{くろ}部^べ巴^は美^み

文化祭理科室で振るフラスコの色変わるとき心はじける

江東区立東陽中学校三年（東京都）

久岡日南子

できるかとカマを片手に緊張し刃先のトンボに心和ます

和光中学校二年（東京都）

亀石理多

問題が分からなくても何か書くチャンスの前髪掴む気持で

東京学芸大学附属国際中等教育学校三年

河添有羽

電車内シンクローの振り確認す周りから来る冷ややかな視線

東京学芸大学附属国際中等教育学校三年

山本英史

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

阿騎の野に宿る旅人うちなびき寐も寐らめやもいにしへ思ふに

阿騎乃野爾 宿旅人 打靡 寐毛宿良目八方 古部念爾(①四六、柿本人麿)

(口訳) 阿騎の野に来て今宿をとつている旅人たちは、のびのびと身を横にしてくつろいで安眠をとることが出来ようか。(いや出来はしないのだ。)あの草壁皇子御在世の昔を次々と思うにつけても。

輕皇子(後の文武天皇で、日並知皇子(紀には草壁皇子ともある方)の子。)が阿騎野に遊獵されてここに宿られ、御父日並知皇子を追憶されたとき、人麿は扈從して長歌を詠んだ。それに続いて短歌と標し、以下の如き四首が出ている。「旅人」は皇子を中心にした多くの従者を指す。「寐も寐らめやも」の「寐」は、寝ることに当る名詞で、今日の「睡眠」に当る。「寝」は一音節の動詞で、今日の「ねむる」に当る。この「寐」は「寐」と熟して「寐を寐」から又「寝」の動詞も生れている。「らめやも」の「らめや」は「らむ」の已然形「らめ」+やで反語になり、「も」は詠嘆の助詞。「うちなびき」は諸注「安く臥したるさま」「くつろいださま」と静止態に取つているが、この語は原義は「荒磯の上にうちなびきしじに生ひたるなりの…」(④五〇九)「荒磯や生ふる玉藻のうちなびき一人や寝らむ吾を待ちかねて」(④三五六二)等の使用例に見られる如く、その運動態の写生に根ざすものであることを考えると、この歌の第三句も「うちなびきて」ととり「あちらこちらに動いて―輾転反側して」の意にとるのが妥当ではあるまいかと思う。この歌を茂吉は「響に句々の搖ぎがあり、単純に過ぎてしまはないため、餘韻おのづからにして長いといふことになる。」と評している。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ^{ひむかし}

東野炎 立所見而 反見為者 月西渡(①四八、柿本人麿)

(口訳) 東の野にまさにさし昇ろうとする太陽の曙光のかがやきがさしそめて、その時うしろをふりかえつて見ると月が淡い光をたたえて西空に傾いているよ。

有名な秀歌。アララギで百人百首選をした時も七十八人とられている。「かぎろひ」の仮名書は「迦芸漏肥」のもゆるいへむら(履中記)があり、集中他には「蜻火^{カキロヒ}のもゆる春べ」(⑩一八三五)「炎^{カキロヒ}の春にしなれば」(⑥一〇四七)の例もある。今日の「陽炎^{カキロヒ}」の意の語であるが、この歌では、陽炎ではなく、早朝、太陽が昇ろうとして、東の野の彼方に茜色の光がちらちらさす事を言つたものである。長歌から、雪の降つた朝の阿騎野(奈良県宇陀郡大宇陀町のあたりで、丘陵地帯も含めて野と言つた)であることが知られる。まことに壮大な、しかも凜冽清爽な自然美の把握がある。東の方―西の方とその視角を百八十度動かして、東西に亘る大きな空間を包み、その焦点に「渡り行く月」の的確な動的写生を据えて居り、その真率雄大な把握と流動的声調とが相俟つて古來稀な秀作となつたのである。この歌の原文は前掲の如くであるが、意字表記が多いために古い訓では「アヅマノノケブリノタテルトコロミテカヘリミスレバ ツキニシワタリ」などと訓んでいたのを、真淵に至つて今の訓を得たのである。注釈には「真淵の改訓によつて千年の間埋もれてゐた佳品の生命がはじめて發揮せられた事を思ふ時、学者の功業またうれしからずや」と述べられている。

童謡 「こいぬの コロちゃん」

高橋育郎 作詞

こいぬの コロちゃん かわいいな

ミルクがだいすき ピチャピチャピチャ

ペロペロ おくちを なめている

こいぬの コロちゃん かわいいな

おさんぽだいすき トコトコトコ

きらきら おひさま まぶしいな

こいぬの コロちゃん かわいいな

おひるねだいき スウスウスウ

ムニヤムニア おゆめを みてるかな

コロちゃん コロコロかわいいな

みんながコロちゃん だいきだ

かわりばんこに だっこする

年間童謡詩集「こどものうた98」

平成10年 日本童謡協会編

『俳句』

独り居のやはき日射しや冬支度

田中清秀

徳利を二本空けたる焼秋刀魚

飛び跳ねて一つ失敬烏瓜

重野善恵

天高し我物顔のクレーンかな

秋霖や点滅滲むスカイツリー

浜田

熟れはじめ存在知られ庭の柿

榧の実もこんがり焼けたひとり酒

今泉由利

山栗はマロングラッセとなりにつけり

初秋刀魚作法かまはず食ひにけり

柳田皓一

生焼けかまだ火だるまの秋刀魚かな

逞しき腕に捏ねられ走り蕎麦

松本周二

一湾の秋夕焼けや富士の影

古民家に打ち方習ふ走り蕎麦

山迫京子

群れなして翔ちては戻る稲雀

新蕎麦や雲に隠るる浅間山

森岡陽子

カンツオーネ聞き夕暮れの焼秋刀魚

軽やかな音立て落つる零余子かな

山元正規

のびやかな水車の音や走り蕎麦

津軽氏の築きし土手や虫時雨

今泉如雲

津軽にも円空仏や秋の雲

小さき音小さく響き野分晴

植村公女

整然も雑然も好き鱒雲

秋澄むやすれ違いをり松葉杖

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

名月や寝ながら拝むていたらく

三日月や江戸の苫屋も秋のくれ

豊年の大稲妻よ稲妻よ

夕やけやから紅に露しぐれ

露の玉つまんでみたる童かな

星さまのさゝやきたまふけしきかな

かさね吟行会

「平林禪寺」 十月

田中清秀

今月のかさね吟行会は初秋の紅葉を求めて関東の名刹、臨済宗の金鳳山平林禪寺を訪れた。平成二十九年十月十三日、東武東上線志木駅に集合し、駅からバスに乗り二十分ほどで平林禪寺門前に到着する。残念ながら今回は秋雨煙る肌寒い一日となった。

大門通りから入場すると綺麗に掃き清められた境内が静かに広がり、質素で重厚な作りの総門、金剛力士像のある山門、本尊の釈迦如来像を祀る仏殿の三つの茅葺きの伽藍が一直線に配置されている。紅葉にはまだ少し早いが色付き始めた楓が見受けられ境内はもう既に秋の装い、小雨の風景は一幅の水墨画のようだ。また、境内裏手の広大な雑木林は国の天然記念物に指定され、武蔵野の風情を今にとどめる貴重な文化財となっている。

露けしや一山杉の作る闇

小雨なか染まらぬまにもみじ落つ

晩秋に一歩近づく今朝の雨

周二

陽子

さち子

武蔵野の色づきを待つ温め酒

浜田

多くの米国人が日本に來たい理由の一つに禅(ZEN)を学びたいとの思いを持っていると聞く。そんな世界に通用する禅宗は經典を重視せず坐禪と師家との問答で修行をする仏教の一派である。インドの達磨大師によって開宗され、日本では栄西が臨済宗として、曹洞宗は道元により鎌倉時代以降一般に広められた。臨済宗では公案を考えながら坐禪を行い、そして坐禪は通路の方を向いて座る。一方、曹洞宗は壁に向いて心を無にして座ると言われている。いずれにしても自己の仏性を内観し悟りを開くことを目的とする。この平林禪寺にも僧堂があるが修行の場となっており一般の立入は禁じられている。また、修行には作務(さむ)という労働作業もあり雲水たちが切磋琢磨して師家の指導のもと日々精進している。

秋霖の素足を濡らして修行僧

秋雨の陰に干さるる作務衣かな

秋霖や坐禪燈籠苔むして

清秀

皓一

京子

本堂に向かって左側、山門の脇に半僧坊権現を祀る御

堂（感応殿）がある。これは寺を守る鎮守で縁起は浜松にある方広寺に由来し、不思議な靈験は境内の松や杉に天狗の半身となり現れると言う。余談だが日本画で高名な小倉遊亀の夫君である小倉鉄樹がこの感応殿の堂守をしていた。鉄樹は禊と禪の修行に励み、合わせて多くの有意の学生を指導し実社会に送り出している。

この禅寺を散策するとその六百五十年にわたる歴史の重さを感じると同時に不思議と人間の精神に響く感動を覚えるのは禅の功德によるものだろう。平成二十一年には天皇后両殿下が行幸されている。そして、多くの日本画家や作家も武蔵野の風景の美しさに魅了され、その趣深い風情を作品に描いている。

鉄斎の画きし堂やもみいづる

榎巨木まだ天に伸び鶴の鋭

五百歳高野榎にも秋しぐれ

由利

素山

れい子

入口近くの総門脇には樹齢五百年と言われる高野榎の大本が立派にそびえ立ち創建以来この禅寺を見守り続けている。また、この寺は戦国時代には幾多の火災に見舞われた。その為、平坦な武蔵野では野火を見張る小高い土盛りが作られ野火止塚として今に残っている。そして、

玉川上水から分水した防火用水が平林寺の池まで引き込まれている。

本堂裏手の三〇〇坪の墓地はすべて大河内松平一族の歴代の廟所である。三代家光、四代家綱に仕え知恵伊豆といわれた伊豆守松平信綱の墓を始め一六〇基余りの墓石が並ぶ、これだけ一大名の一族が集まっているのは例がないと言われている。高浜虚子は「知恵伊豆の墓に俳句が詣（まい）りけり」と詠んだ。

散策の後の句会は志木駅に戻り、駅前のカラオケハウスを利用した。一曲の歌の披露もなく全員黙々と句作に取り組む。囁目三句いつものとおり名句が揃い、楽しい吟行会はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 十二月八日（金）

場所 すみだ水族館

集合 半蔵門線・浅草線

押上（スカイツリー前）駅

東京スカイツリータウン方面

申込 森岡陽子宛 (03) 3712-2835

『酔いの徒然』（六八） 丸山酔宵子

『マティニー・イン・ニューヨーク』

9月の澄み切った青空が広がるニューヨーク・マンハッタン。ビルの谷間から差し込む陽射しは未だ鋭い。

しかし夕刻ともなるとウォール街のボウリング・グリーンの巨大な雄牛の銅像チャージング・ブル（Charging Bull）にも爽やかな風が通り抜けて行く。株式用語で雄牛（Bull）とは右肩上がりを示し、反対に右肩下がりであることを熊（Bear）と表現している。

ウォール街近くには有名な Bull & Bear ステーキ&バーがあるが、イギリスのアルコール専門誌「ドリンク・インターナショナル（Drinks International）」が毎年発表している「ワールド・ベスト・バー」のトップ10

の二つがこの周辺にある。「ワールド・ベスト・バー」は世界トップクラスの著名なバーテンダーを含む400名以上が審査に加わり「世界最高のバー」を独自の基準で順位付けしたもので、日本では23位に銀座の「バー・ハイ・ファイブ（Bar High Five）」が入っている。

堂々一位にランクされているのが、チャージング・ブル近くにある「デッド・ラビット（The Dead Rabbit）」である。19世紀アイリッシュ・ギャングが仕切っていた一角にあり一見バーとは思えないチャームिंगなエンターランス。扉を開けると、ワールド感あふれたウッディ基調のアイリッシュ・パブ。まだ夕刻4時前とは言え、スーツにネクタイのビジネスマン、ジャーナリスト風な人たちでカウンターは満席。壁際立ち飲みで、今宵ニューヨークバー徘徊は、ブルックリン・ドラフトビールのワンポイントでスタート・・・。

ウォール街からウエストヴィレッジにしばらく歩くと

もう一つの隠れ家的オーセンティックバー「エンプロ
イーズ・オンリー (Employees' s Only)」。入り口手前
つまりグルテンフリー。ここまでアメリカではヘルシー
志向が浸透しているのか・・・。

からマホガニーの長いカウンターが続き、奥にはテーブ
ル席もあつて食事もゆつくりできる。カウンターは勿論

マティーニに愁思六腑をまさぐられ

満席で、立ち飲みでお目当てマティーニを、「ウオッカ、

酔宵子

ストレートアップ、ツイストでPlease・・・」と、白服
のバーテンダーにオーダー。

通常マティーニと言えば、ジンが一般的であるが、
007のジェームスボンドは、勿論ウオッカ・マティー
ニで、ニューヨークではウオッカ・マティーニが一般
的。冷え冷えのニューヨークスタイル大きめのカクテル
グラスを賑々しく運んでくる。これぞ、ニューヨーク・
マティーニと期待に胸を膨らませて一口飲めば・・・ム
ム・・・思いがけぬマイルドな滑らかさ。ウオッカは、現
在ニューヨークで大人気、テキサス ハンドメイド・ウ
オッカ「テイトス (TITO'S)」。因みにコーン100%

本からのあれこれ (25) 米田文彦

「江戸川柳3」

十二月だから忠臣蔵の討入関連の句をいくつか。

よい見世が出たと家中のうっそりさ

(品が良くて安い店が近所にできたと喜んでい

吉良の屋敷。浅野の浪人の探索とも知らず)

そば切りが二十うどんが二十七

(謎句。合計すると四十七。本所松坂町の吉良邸

近くの蕎麦屋に浪士集合のときの注文。うどん

が多いのは冬だからか? 川柳的想像)

何ごとでこうおそろいとそばや言う

(こんなに大勢で来て、一体なに?)

知れてゐるものを数える泉岳寺

(お墓の数は四十七です)

泉岳寺他宗もみんな引きつける

川柳には医者、代脈の句も多い。

代脈は若党で来た男なり

代脈は何をこいつの気で見せる

(こんな奴にわかるものか)

代脈がちと見直した晩に死に

(だいぶ良くなつた、と喜ばせた晩に・・・)

藪医者のはいつた家に殺気立ち

医者どのはけつくうどんで引かぶり

(風邪ぐらいならこれでも・・・?)

病人の周りの人もいろいろで、

うわごとを笑って医者に叱られる

まだ死にもせぬのに泣いて叱られる

歌舞伎の花川戸の助六は紫の鉢巻き

助六は江戸一番の頭痛もち

なるほど、お堂を見ると拝みたくなる。

どう思ったか聖堂で数珠を出し

(聖堂 湯島にある孔子廟。お寺に紛らわしいが

儒教の本拠で数珠はおかしい)

聖堂は宗旨のしれぬ手を合せ

読めぬ字をなにという字に読んで置き

串という字を蒲焼と無筆読み

かぞへ日は親のと子のは大違い

(子はもういくつ寝るとお正月、親はあと何日で

大晦日の支払日、と大違い)

大三十日首でも取ってくる気なり

(落語ではここで、大三十日首でよければやる気なり)

大三十日内儀まことしやかに述べ

からめ手は女房のふせぐ大三十日

掛取が帰ったあとでふてえ奴

(てめえの方がよっぽどふてえ奴)

いまだ帰らぬを掛とり聞きあきる

(侍も逃げ一点張り)

裏店の浪人は質屋にもお馴染み。

浪人は長いものから喰ひはじめ

(背に腹は代えられず。槍、刀、)

いくらいらいますと質屋はずらり抜き

抜いても見もせず番頭百投げる

(よほどの安刀)

元旦はまだこわいから戸を開けず

女房をちっと見直す松の内

もういくつ上がると雑者聞きあわせ

最後はきれいに「雪見」です。しかしそこは川柳です
からこうなります。

子はこたつ親父はころぶ所まで

(親父は風流を気取つて、「いざさらば雪見にころ

ぶ所まで」と出かけるが、子は現実派。親父も

風流は寒いものと気がつく)

雪見には馬鹿と気のつく所まで

銭のない雪はこたつと首引き

(銭があればずっと上等で楽しい雪見を知っているのだが、あいにく・・・)

昔、蛍の光、窓の雪明かりで読書した人がいたとか。

注を読む時に蛍はゆすぶられ

雪で見る書籍へ落ちる水つばな

長い間ご愛読ありがとうございました。

ある自然科学者の手記 (67) 大橋望彦

『忘れ得ぬ一言』

誰にでも、一度聞いたことが、忘れられないことと云うことがあるものであろう。それも、そんなこと、と云える様な、一寸したこともある。小生にも、別段特別な事と云えないまでも、これがフツとした時に思い出すこととして、出てくるものがある。

学生アルバイトで、理化学研究所の中原研究室に、ひと夏の間、試験管洗いに行っていたことがある。研究室は、普段の真剣な研究生活と言うのが漲みなぎっている雰囲気と、昼の食卓を挟んで、中原和郎先生（後の癌研、がんセンター研究所所長）を中心に、極めてアト・ホームな会話の中に、色々な勉強になるお話も沢山聞かせて頂けた。其処には、学生アルバイトも、偉い先生も、全く隔たりの無い自由な意見交換が出来る場所でもあり、この経験は、小生の現在の性格にも、多大な影響を及ぼしているものと、自覚している。そのような仕事場の中で、

中條（チュウジョウ）先生（後の東邦大学の名誉教授になられた方）はとてもユニークな方と感じているが、何時もパイプを口に啣くはえて、悠然と実験をしておられ、大きなノートを机の上にドンと置いて、丹念に実験計画から、実験結果をこまめに記録しておられた。研究者としての基本的マナーと云えることであるが、仲々これが励行することは難しく、記録を後回しにしてしまうことも多いのであるが、中條先生はそうでなかった。よく観ていると、先生は、物事を思ったらば直ぐに手を出さず、一拍考えてから行動する、ということが身につけておられるようであった。ある時、そのような先生が、いつもの調子で、ニコニコしながら、「大橋さんは、試験管を洗う時に、中から洗うの、それとも外から洗うの？」と聞かれたのである。咄嗟とつさのことで、実はそれまで真剣にそのようなことを考えたことも無かったので、返事に詰まった。でも、アルバイトと言えどもお給料を戴かいている以上プロでなくてはならない事ぐらひは大学生であるのだから、チャンとした返事をしなくてはならないのと、この先生の質問であったので、必ず何らかの理由があるのであると、直感的に考えた。そこで、普段考えても

いなかたが、『僕は、外側から洗います。中側を洗うのに、綺麗になつてゐるかどうかを見易いように、・・・』と返事をした。『そうか、流石は大橋さんだね』と、云つて下さつた。ホツとしたやら、何か疚やましい様な気がした。しかし、それ以来、試験管は必ず、外側から洗うように義務付けられたような気がする。何で、中條先生は小生にそのような質問をされたのかは、未だに判らないのだが、いい質問をして下さつたものと思つてゐる。

『どつちから洗うの?』どつちから洗つたつて、同じといえは云えるのだが、要するに綺麗に洗えばいいのでしよう。と言う事なのに、拘こだむることなのであらう。ここで拘つてしまつたお陰で、未だに、試験管に限らず、炊事の時に食器を洗ひながら、ついそのことを思い浮かべるのである。もう何十年も昔のことではあるのに：。

今の時代は、試験管洗ひという言葉も死語となつてしまつたのではないだらうか。全て、デイスポーズブルの時代となり、シャーレや、試験管も使い捨ての世の中となつてゐる。それは、一つには、分析の精度が上がり、少しでも洗ひ方が悪くて、前に用いた不純物が付着でもしようものならば、実験結果に直ぐ反映してしまふから

で、よほど注意して洗わない限り、信用されなくなつてゐる。昔は、ガラス器具類といへば、クロコン（クローム硫酸を濃硫酸に溶かし、その飽和した状態の混液のこ）に一晩漬けて完全に酸化洗浄し、有機物の混入が無いものを水道水で洗い落とし、更に、蒸留水で注いで乾燥させたものが使われていた。しかし、現在は、そのクロコンは、公害問題で使用禁止となり、それに代わるよい方法も無く、使い捨てのものが信用されるようになつてしまつた。それは、プラスチック製品がガラス製品に替わつて安定で、不純物の混入が少ないのと、高温処理による殺菌効果と、包装技術の向上により、無菌的に扱われ、不純物の混入が極めて少ないことから必然的にそうなつたのであらう。それに、量産により、ガラス器具よりもプラスチックのほうが廉価になり、軽量で、保存性も向上してきている。イノベーション(技術革命)のお陰である。その反面、洗うことに無関心になつたのでは、逆効果かもしれない。『忘れ得ぬ一言』が、時代遅れの一言となつた感もするが、拘りは、忘れ様も無い。

絹の話 (85)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

「絹と私」

絹との出会い

私の絹との出会いは終戦間もない小学校低学年頃、母親や祖母が裏庭の日だまりで、和服を解いて水洗いを済ませた幾つにも分かれた生地を、それ用に加工された大きな長い一枚板に空気が入らない様に丁寧撫ぜている姿でした（洗い張り）。乾いたそれをめくりとるのが子供の仕事で、「スー」という微かな音と共に新品の様な柔らかなくて張りがあり、シワが無く、僅かな日だまりの様な匂いを感じながら満たされた気持ちになったものです。

中学生になった頃、母の姉が離縁して母のもとで暮らす様になり朝夕の勝手仕事を手伝うかたわら、向かいの小さな一軒家で和裁の仕事をしていて、伯母の空き部屋で勉強すると言って伯母の家に行き、勉強せずに、糸を針に通す前に張った絹糸を長く引いて「ピンピン」と音を立てたり、火鉢に入れてあるコテをほほに近づける仕事を夕刻まで眺めていたのが、私の絹との出会いの始まりでした。

通学路の途中には桑畑があちこちに点在し、桑の実も子供達の格好のおやつでした。養蚕農家もあり、世はガチャマン景気であちこちの路地から勢いのよい杼（ひ）の音が響いていました。

今思えば教えてもらおうわけでも、習う訳でもない貴重な体験で「百聞は一見にしかず」「門前の小僧習わぬ教を読む」そのものでした。こんなささやかな経験が私を野蚕絹屋にしてしまった遠因かも知れません。

それはあまりにも素朴な体験で、今日の仕事関連で何代も続いている方々の身にしみ込んでいる経験には及びもつきません。

野蚕絹との出会い

昭和52年頃、友人からインドのスタッフと事務所を譲り受け、従来日本では表地に使わなかったインドの更紗を表に使ったコートドレスなど製作してホークロアブームを起こしていました（後日エスニックブームとなる）。

そんな時、木綿とも違う見た事もない不思議な絹（タサール蚕）が入荷し、その手袖、手織りの力強い荒々しさに魅了されてしまいました。早速それらの厚い生地や薄い生地でブラウスやコートを作って店頭に出すと、芸能人や政治家、学者などの目にとまり、ファッション雑誌の取材も連日で、テレビの特別番組が組まれたりする

様になり、その中に野蚕を研究する先生方も来られる様になりました。

研究所や大学の先生方が来られると、隣の近衛家の縁戚が経営する壁や天井が全て柞蚕袖で内装された喫茶店に案内し、先生方の会話の糸の形状、野蚕の色素、機能性等々を固唾を飲んで聞いていました。

この頃は、既に家蚕の養蚕や病理等に関する研究はほぼ完結されていて全国各地道府県に置かれていた蚕糸試験場が行政改革により廃止され、筑波の蚕糸昆虫研究所に統合された時期でした。

研究者の有志は国内、国外に呼びかけ家蚕に代わる新たな野蚕の研究をすべく「野蚕研究会」を結成し活発に活動をしていました（後日、日本野蚕学会になり、国際野蚕学会が結成される）。

私はもともと野蚕の事が知りたいと学者でもないのに入会し、長野の穂高で開かれた第3回国際野蚕学会の役員（ドクターも英論文も無く、専門の研究者でもない者が役員とは如何なものかと、日本学術会議から会長が注意を受ける）として企業展示コーナーの設営、運営と野蚕大国インドからの研究者の案内係を担当し、以後野蚕学会の中では親しく意見交換が出来る様になり、益々野蚕絹の機能性等の不思議にのめり込んで行きました。

野蚕絹に囲まれた生活

アトリエは書類の他は絹ばかりです。その中に居ると気持ちが悪くなります。だから絹張りの喫茶店は落ち着いた気持ちになつたのでしよう。

絹の日傘の下に居ると木陰にいる様な気持ちになると言われるわけが分ります。

絹の5本指の靴下を履いてから水虫の痒さから解放され、下着のシャツやトランクスは血行を促進する様で穏やかに暖かく、夏でも蒸れなく汗くさくならないので（抗菌性）洗濯の頻度が減るようになりました。

寝るときも柞蚕やエリ蚕のシーツを敷いたり掛けたりしています。綿より早く暖かくなり安眠促進です。深夜大地震で避難する時は緩衝性があり低体温防止のシーツを持つて逃げようと思っています。

耐久性は綿にはかきませんが、使用後は細かく切つて切り傷に絹を当ててからバンドエイドすると傷口が早く治ります。それを鉢植えの根元に入れると、水やり忘れても植木のしおれをカバーできます。

自然からの贈り物の絹が地面にかえるまで使っています。その様な絹のお陰か健康診断も優等生です。

楽しい時間 61

山本紀久雄

2017年10月30日

とんかつブーム

最初に、最近いわれている高齢者の注意事項「なにぬねの」を紹介したい。

「な↓難聴、に↓認知症、ぬ↓抜け毛・魂)、ね↓寝不足・睡眠欠乏症、の↓脳梗塞」

これへのコメントは、敢て、いたしません。

10月9日(月) 体育の日、朝のテレビニュースで「今日は、東急池上線が一日フリー乗車となります」と報道された。池上線の知名度アップが目的とのこと。そういえば池上線には乗車したことないなあと思ひ、始発駅の五反田に着いたのが10時。

東急池上線は大正11年(1922)、池上本門寺に参拝客を運ぶためにできた電車で、今では品川区の五反田から、大崎広小路、戸越銀座、荏原中延、旗の台、長原、洗足池、石川台、雪が谷大塚、御嶽山、久が原、千鳥町、池上、蓮沼、大田区蒲田までの15駅間を走っている。

五反田駅には、既にフリー乗車券をもった乗客が大勢いる。

乗車して最初に向かったところは洗足池、ここは駅名にあるように池があり、今日はボートが無料ということで、子供連れが長い列をつくっている。その間をかき分け、向かったところが勝海舟別邸跡。

しかし、何と、平成30年3月まで公園改良工事中で、あるの

は説明板のみ。折角来たので読んでみると次のように書いてある。「海舟は、官軍の参謀西郷隆盛(南洲)と会見するため、官軍の本陣が置かれた池上本門寺に赴きました。その会見により江戸城は平和的に明けわたされ、江戸の町は戦禍を免れたのです。海舟は江戸庶民の大恩人と言えるでしょう」

江戸無血開城は、慶應4年(1868)3月13日、14日に田町の薩摩藩江戸藩邸において行われたというのが史実。明らかにこの説明板は問題であるが、こういう歴史的な看板、一度、揭示されると正しい内容への訂正変更と、撤去は大変難しい。理由は「地元民の反対」である。

地元の人々は居住している地域が、重要な歴史に関わっていることに誇りに思っているから、史実の妥当性を超越する地元愛が優先し、結果として歴史を阻害する。

次に向かったのは池上駅で、池上本門寺の参拝である。池上本門寺は日蓮宗の大本山で、日蓮聖人入滅の霊場であることを証明するように、立派で格式のある寺である。さすがと思ひつつ参拝し、池上駅に戻ろうと駅近くの交差点に来て、向う側の歩道を見ると、大勢並んでいる。まだ、11時。これは何だろうと、近くに寄ってみると、何と「と



んかつ燕楽」のれん。とんかつを食べようと行列しているのである。ラーメン店頭での行列は、よく見かけるがとんかつは目黒の「とんき」以外知らない。

「とんき」は外国人向けのガイドブックにも掲載されている、目黒駅近くの有名店であるが、この「燕楽」は知らない。そこで、この店の評判を書き込みを読みしてみた。

《豚カツを食べるなら・・・っと、決めているお店がありまして、大門の『のもと家』さんと、池上の『燕楽』はその筆頭格です。そんな訳で、久々に池上の燕楽さん行つて来ました。こちらで注文するのは先ずは『ロースかつ』、次は『ひれかつ』あとは・・・その日の気分です注文かな。そう言う訳で、この日はロースかつを定食で注文しましたので、カツが出てくるまでの間はお新香とポテトサラダをつまみながら待ちます。

待つ事暫し、ラードの香りも心地よい黄金色の見目麗しいロースかつが登場！こいつは先ず何もつけずに二口・・・ううう旨いなあ。

次は岩塩・・・お肉の旨味がUPしたぞー！！最近流行りのサシの多いロース肉ではなくて、脂の旨味では無くてしっかり肉の旨味を感じられる美味しさ。

因みに・・・ソースはキャベツのみ、カツも美味いけど・・・実はキャベツも美味いー！！やはりその場でカットしているせいかな？？これも誰も注目しないけど、美味いんだよなあー」正に絶賛である。

10月6日(金)日本テレビ「News every」は「今はとんかつブーム」を放映した。

《今、とんかつが盛況で、様々な企業がとんかつに熱い視線を注いでいる。とんかつ、カツ丼の市場規模も、2015年は

381億円で前年比21%増、2016年は444億円で前年比16%増(「富士経済」調べ)と、拡大を続けている。ブームを逃すまいと、すかいらーくグループ、丸亀製麺などを手がけるトリドールホールディングス、リンガーハット、ダスキンなども参入を始めた。その成長を牽引しているのが、ワンコインとんかつだ。最大手の「かつや」は490円で提供するかつ丼が爆売れし、なんと11期連続の増収を達成した。そして、そのかつやに迫るのが、牛井でおなじみの松屋フーズが手がけるとんかつ専門店「松のや」だ。とんかつ市場が成長している背景について、「月間食堂」の通山茂之編集長は「二つは、女性の社会進出、引退した団塊世代など老夫婦だけの世帯の増加で、家庭で揚げ物をやらなくなってきたということがある。つまり、家庭で行う調理のアウトソーシング化が進んでいる。牛カツ」という新しいジャンルも出てきており、揚げ物全体が伸びている。

もう一つは、揚げ物は時間管理と温度管理ができれば品質がぶれにくく、システム化しやすい。外食業界は人手が足りない状況なので、パート、アルバイトでも安定した品質が出せるというのは外食チェーンにとって魅力」と話す。

また、「HOT PEPPER」が訪日外国人に対し「おいしかった食事」についてアンケートを取ったところ、とんかつ(カツ丼やカツカレーを含む)はラーメン、刺身に続いて第3位にランクインしている。

「二口目に食べた時の脂質、糖質、塩分がおいしさを決める3要素。その意味で、とんかつはパンチがある食べ物。世界的にみんながおいしいと感じやすい食べ物」という。

いつのまにか、外国人にもとんかつが人気になっている。時流は常に動いている。

漢詩研修 (十二)

千代田岳精会 平井茂行

中秋の月

蘇

軼

暮雲收 盡清寒溢

銀漢無聲轉玉盤

此生此夜不長好

明月明年何處看

暮雲收盡溢清寒

銀漢無聲轉玉盤

此生此夜不長好

明月明年何處看

【作者】蘇軾（一〇三六～一一〇一）北宋の詩人、文章家。北宋の文章家蘇洵の長子で、弟が蘇轍である。洵・轍と合わせて三蘇という。唐宋八大家の一人。字は子瞻、号は東坡。眉州眉山（四川省眉山県）の人。父の蘇洵は諸方に遊学がちだったので、蘇軾は十歳のころ母から学問を受けた。二十歳のころにはひろく経史の書に通じ、一日に数千言を書くようになった。また賈誼や陸贄の書を愛読し、特に『莊子』を読んで、「この書わが心を得たり」と感嘆したという。

【解説】この詩は「陽関詩」三首のうちの一首である。熙寧十年（一〇七七）の中秋の夜、弟の轍とともに彭城（江蘇省銅山県。項羽が都したところ）で月を観て作ったもの。陽関曲調子で詠じたと自ら題している。

【語訳】※収・・とりかたづける。 ※尽・・なくなること。 ※銀漢・・天の川 ※玉盤・・玉で作った大皿。月のことをいう。 ※不長好・・いつも好いとは限らない。部分否定である。 ※明月・・明るい満月 ※明年・・来年

【通釈】夕暮れの雲はすっかりどこかへしまいこまれて、いまはすがすがしい冷気が夜空に満ち溢れている。天の川の流れは音もなく、玉の皿のような月を天上にめぐらせている。限られた我が生涯、いついつまでも、こんなすばらしい中秋の夜に会えるものではない。この満月の素晴らしさを、来年はどこで看るであろう。

「歴代天皇御製歌」(八十三)

賈名海屋資料館

「明治天皇」②

(明治十五年・一八八二年 三十一歳)

夕立 高間山くもとどろきなる神の聲にきそひてゆふだちぞふる
かきくもり降るゆふだちに荒磯の波もしばしは音なかりけり

(明治十八年・一八八五年 三十四歳)

落葉 ひとしきりさそひし風はしづまりておのがまにくちる紅葉かな
冬泉 冬ふかき池のなかにもほとばしる水ひとすぢはこほらざりけり

(明治二十三年・一八九〇年 三十九歳)

大日本帝國憲法公布。教育勅語渙発
京都をいでたむとするころ茶亭にて。

わたどのの^渡下ゆく水の音きくもこよひひと夜となり^殿にけるかな

(明治二十四年・一八九一年 四十歳)

社頭祈世 とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢のおほかみ

(明治二十八年・一八九五年 四十四歳)

日清戦争終る。三國干渉により遼東半島を還付

旅順の戦のさまをききて

世にたかくひびきけるかな松樹山せめおとしたる突撃の聲

(明治二十九年・一八九六年 四十五歳)

としぐに光そひてもみゆるかなやまとしまねの秋の夜の月

(明治三十一年・一八九八年 四十六歳)

山かぜの音すさまじきゆふぐれに雨もまじりてちる木の葉かな

(明治三十一年・一八九八年 四十七歳)

落花 春雨のふる日しづけき庭の面にひとりみだれてちる櫻かな

月前言志 あきらけき月にむかへばひさかたの空もしたしくおもほゆるかな

土偶(1)

夏 目 勝 弘

週一回は豊橋に出て、書店に行き、書棚に並べてある本の題名を見て店内を巡る。

二階の通路に平積された「土偶」に関係する本十種類ほどがあった。手に取った瞬間、六十数年前のことが思い出された。それは書棚の引き出のなかに、一個の土偶があった。

X字形土偶(縄文晩期)だと今は思うが、土偶と一緒に数本の石棒が有ったが、今は手元にはない。

父の記録によると、終戦後に駅前に出る道路の工事中に、土偶が一個出土したとある。

生まれてより現在に至るまで、縄文人が生活していた縄文晩期と同じ土の上で生活している。

その場所は、本宮山から南にのびる扇状台地の下位段丘の標高三十八メートル附近に中三十メートル長さ五百メートルの南に二級河川の豊川中流右岸の段丘上に営まれた、縄文文化晩期の聚落址である。

北の本宮山麓からの蟹川が東側に流れ、西側には宝川の流れが、それぞれ南に流れ入る豊川の支流に囲まれた、縄文遺跡の多くある地形でもある。

土偶が出土した所は、自宅より五十メートル余りの所、甕棺を自分の手で発掘したのは土偶の出土した所から十メートルも離れていない所である。

甕棺は水神平一帯で十八個出土しているが今の所土偶は一個のみ、甕棺と土偶は関係ある対の物であると思われるので、まだどこか

で眠っていると思われる。

こうしてみると、縄文人とは無関ではないような気がし、二万年余つづいた縄文の人々の生活を垣間見たくなった。

世界に類を見ない、二万年という期間を同一の人類が残した文化を知るには、貝塚から出土する土偶や、土器、生活用品、道具類、等々縄文人が使用した品々で知ることしか方法はないのではないか。

土偶の一番古いのは、滋賀県の東部の愛知川と支流の渋川の合流した場所で、高さ三・七センチ、最大幅二・七センチ、重さ二四グラムの顔の無いが女性と一目で分かる小さな土偶である。

年代は今から三万三千年前の縄文章創期の根谷熊原遺跡である。土偶が今までに発見されたのは二万八千点ほどである。

発見場所は、不要品の廃棄場所の盛土のなか、堅穴住居の片隅・集団の暮しの祀りの場所、お墓など。

状態は石で囲まれ、丁寧に寝かされたように思われる場合もあり、打ち捨てられたと考えられる場合もある。

丁寧に扱われているものはまれである。多くはバラバラに碎かれたり、土偶の部分のみ、片足とか頭部とかが碎かれている土偶が多い。

碎かれた足等は、本体が詰められた所から二・五メートル離れた所から発見されたものあり、本体の近場でないことが多い。

理由は、多くの研究者が論文を発表しているが、どれも頷けるが、真実はわからない。

現代でも六月と十二月になると、神社より人形を送ってくる。その人形を体の悪い部分を摩り、送り返すと祈禱をして、お礼を送りかえしてくれ、同じ思とも思う。

(参考文献・はじめの土偶 譽田亜紀子 世界文化社)

「氷魚」のことから (203) 岡本八千代

台風二十一号も去った。衆議院選挙も了った。——今宵は陰曆六日の月が雲の間から光り輝いている。なんとなく心をロマンチックにさせるような夜だ。

「氷魚」の稿は、はや十二月号になってしまふのだった。光陰矢の如しを思う。夏目漱石の死は(1916年)大正五年、十二月九日、六時五十分であったとか。岩波書店創業者の岩波茂雄は、漱石の死にびっくりして夏目家の便所へ落ちってしまったとか？

かつて、私の師事していた名古屋大学教授の助川徳是先生(近代文学)の「エピソード集①」に、夏目漱石のことが書かれていたので、しばらくここに写し書きを試してみたい。

「おいらはニヤンコだぜ、ニヤンコだぜ、ベエビイ。ニヤマエなんてまだニヤンコだぜ。イエーイ。どこ生まれたとか、そうではなくて、つまり、猫という限定されたひとつの状況の中でカオスでありうるっていう存在。そこにほくは、猫という、人間家族に対立した存在のひとつの役割を見るわけです。薄暗いジメジメした路地といいますが、つまりひとつの不滅のジャイアンツの故郷ですね。そこで泣きながら練習する。そこに青春のアクセシデンツがあったわけです。書生ちゃんに会ったのはそこのネ。書生ちゃん？とつてもモア・ベターなのよネ。」

この二十一世紀版、通釈「吾輩は猫である」(加藤芳一氏

案による)の原作者、夏目漱石は、本名を金之助と言った。——泉鏡花はのちに、「漱石ですか。イナセなお方でしたねえ。キンチャンとお呼びしたいくらいでしたよ」と語っているほどであった。

小さい時、キンチャンと呼ばれていたために、漱石の作品にはKというイニシャルの登場人物が多い。と。(荒正人氏の説)

大学予備門の頃、同級の橋本左五郎が作った漢詩の中に「何ぞ憂へん席序下算の便」という句がある。席次(成績が上位のものから示した順番)が低いので、下から勘定したほうが便利だというのである。一年の時の初夏、腹膜炎にかかった金之助は、病気で学年試験が受けられないので、追試験を願いだしたが、当時、工部大学と外国語学校が予備門と合併する騒ぎが起っていて、教務係が取り合ってくれない。——これも自分に信用がないからで、信用をうるには勉強するに限る。いっそ初めからやり直せと、進んで落第して、二年をやり直した。文豪夏目漱石は落第したこともあったのだ。(以上助川先生のエピソード)

そこで、金之助は、正岡子規と出会ったのだった。かくして、子規の「七草集」より漱石の「木屑録」へと文学への眼が開けてゆくのであった。一人とも尊敬し合う友情、二人ともユ一モアの持ち主であったこと、男同志の信じ合う友情、また恕(ゆる)し合う友情のおおらかさ。などを感じている私であった。

磯辺 耐

みなさまへ③



手術後、ハラがへりすぎてアイスと牛乳かきでん
ビスコ10コすぐ食べました。なかなかの痛み
です。今日からリハビリなのですが、まだ先生は
現れず、「イケニ先生じやなかったらどうしよう...」
と心配しております。同室のみなさまといっしょに
筋トレ、がんばります!!

みなさまへ④



イケメン先生がひきつづき担当です。
同室のみなさんも「知り合いなの?」といふか
いげです。リハビリがんばります♡

編集室だより【二〇一七年十月】

○原宿ミュージックレストラン・ドンナに於て「やまざきれいこ・チャリテイ・ソロコンサート」は「シャンソン」です。

一曲一曲、あの時、あのこと…よみがへりきて、素晴らしい時を過しました。

○秋葉原、アキバUDX・スクエア。

大学共同利用機関博覧会―研究者に会いに行こう！
招きのメールをいただいた。

「国立天文台」「核融合科学研究所」「基礎生物学研究所」「生理学研究所」「分子科学研究所」「素粒子原子核研究所」「物質構造科学研究所」「加速器研究施設」「共通基盤研究施設」「国立極地研究所」「国立情報学研究所」「統計数理研究所」「国立遺伝学研究所」「国立歴史民俗博物館」「国文学研究資料館」「国立国語研究所」「国際日本文化研究センター」「総合地球環境学研究所」「国立民族学博物館」「国立大学法人・総合研究大学院大学」…こんなに沢山の充実機関、研究者の方達が、それぞれに経験、実際を加えて説明下さり…物凄い物知りになった心地。重々しく、楽しく、世の中を知るのでした。「132億光年彼方の銀河からの塵の電波を検出」なんてことを現実と聞く。

○金鳳山平林寺吟行。

小雨が降るのもまた良いもの。下見の時に、大きな岩の頂上。ほとんど「土」もないのに、蕾をもつ百合が数本立っていた。「あの百合はどうしているか！」と気になっていた。花の時は過ぎ、果皮状態の姿になって立派に立っていた。万物に等しく時の過ぎたことを見るのだった。

○「武蔵野市民文化会館大ホール、S席。

アルゼンチン・タンゴ最後の巨匠。「ファン・ホセ・モサリーニ楽団」。タンゴの魂・至上の芸術。

限りなくクリーンに、格調高く、上品であり、日本で、こんなに美しいタンゴに出逢えた。

タンゴを原語で歌う、という講座での同窓生だった、鉦職人の伊藤宗一郎さんが「皆さんと一緒に聞きにゆく」とこのコンサートのチケットを買っておいで下さっていた。奥様から、「宗一郎さんが亡くなってしまったこと、このチケットで、皆さんでコンサートに行つて下さい」との連絡をいただいた。悲しい集まりになってしまったのだけれど、宗一郎さんと一緒に「タンゴ」に浸ることが出来た。

私達は、宗一郎さんを忘れることはない。いつも宗一郎さんと一緒に聞き、一緒に歌い、一緒にお話している。私達が宗一郎さんの居られるところに行つた時は、また一緒にタンゴを歌いましょうね。

野菜の花（18）

鈴木孝雄



○ ブロccoli

葉っぱも食べられるが、私達が通常食用するのは花蕾と茎。収穫適期は冬で、春先まで花蕾を放おって置くと、花蕾は次第に膨れて黄色な花を咲かす。この写真は、今年3月17日撮影。満開近くまで花を咲かすのは、採種のためか、よほどズボラな栽培人の畑でしか見られない。写真目的で放置したため、お陰でこんなに綺麗なブロッコリーの花を、私も初めて見る事ができた。

ブロッコリーはカリフラワーの変種で、キャベツの仲間。キャベツの原産地は地中海から大西洋岸にかけてで、花茎が大きくなる品種は紀元前6世紀からローマ人には知られていた。これはカリフラワーで、17世紀にヨーロッパに渡り、デンマークなどで品種改良が行われた。それとは別に、緑色の花茎の品種がイタリアで発達し、スプラウティング・ブロッコリー（sprouting broccoli）と呼ばれた。Broccoliとはイタリア語で枝を意味する。不思議なことに、イタリアからなかなか外国には伝わらず、米国には19世紀初めに紹介され、Italian broccoliとして普及した。日本では、戦後食生活の洋風化により、初めはカリフラワーが食され、その後電気冷蔵庫の普及で変色抑制が出来るようになり、ブロッコリーが主流となった。

無農薬栽培での悩みはモンシロチョウなどの幼虫の食害。葉についた虫は捕殺できるが、花茎の中の青虫の除去は難しい。差し上げる時は「虫も食べるほど安全です」と渡しているが、茹でる時、青虫が浮かび出て来てびっくりするようだ。

次回はサニーレタスの花の予定です。

お知らせ

△新年号の原稿は、十一月三十日（木）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美